

地獄と極楽・隠岐郡海士町御波

令和3年4月20日掲載

収録・解説・酒井

董美^{たよし}

イラスト・福本 隆男

語り手 前田トメさん（大正3年生まれ）
収録・昭和51年7月11日

あらすじ

昔。和尚さんと小僧さんとおつた。小僧は毎日、「南無阿弥陀仏」と唱えていた。ある日。小僧は和尚さんに、「師匠さん。地獄、極楽を悟るように見せてください」と言った。

そうしたら和尚さんは、「そうか、今日は地獄、極楽を見せてやつけんこつちへ来い」と小僧さんを連れて、遠い遠い野原のようなどころへ行つたそう。

その野原にはテーブルや金銀の食器が並んでいて、ご馳走がたくさん並んでいる。やがて、どこからともなしに田舎風な者や人相の悪い者たちがやって来て、その食べ物を食べるのだそう。その食べ方は長い長いものすごく長い棒の先に匙が縛りつけてあつたそう。それを使わないと絶対に食べられないそう。その人たちが一生懸命にその長い匙で食べようとすけれど、棒が長すぎて周りにこぼれてばかりで、一つ

も自分の口には入らない。

小僧さんが熱心にそれを見てみると、和尚さんが「小僧や、これが地獄じやで。さあ、次は極楽じや。まあ一つ、向こうへ行かあ。」

そこで向こうへ行つたところが、今度もまたテーブルに金銀の食器が並んでいた。今度来た人たちも同じような長い棒に匙がついたもので食べるようになっていたそう。ところがそこに来た人たちは、向こうのテーブルの食べ物を匙ですくって、向こうの人に食べさせる。

そこで向こうの人は口を開けて食べ、また、向こうの人はこちらの人にこちらのテーブルにある食べ物を匙ですくって、食べさせる。お互い思うとおりにも何でも食べられる。

しかし、自分の前の食べ物自分ですくって自分で食べようとすると、とても難しい。

和尚さんは小僧さんにこうして地獄と極楽を教えたあげたのだそう。

人間というものは、自分のことばかりしているのが一番つまらないことです。人のために尽くせば自分も救われ

るのですよ。

解説

ここに登場してくる主人公は、和尚さんと小僧さんである。この二人を主題としたものでは「鮎は剃刀」「指合図」「飴は毒」などの話が知られている。このいずれも和尚さんが小僧さんの知恵に負けてしまうという、逆転のおもしろさが隠れた主題になっているのであるが、しかし、ここではその反対で、あくまでも和尚さんが主導権を握って、小僧を導くという話になっている。したがって昔話の中の笑い話にある「和尚と小僧」譚の法則に添っていない。

この話は、同じ環境にありながら、片方では地獄となり、他方では極楽になっている。自分のことだけを考えれば、結果は決して幸せにはならず、常に他の人に思いを巡らす広い心を持つては、自然と豊かで幸せになるということを表現しているのである。祖先の人たちが子孫にそれとなく教える教訓話なのであろう。

（元島根大学法文学部教授）

